

## 「安息日論争 2」

2015年05月27日

ルカによる福音書 6章6節～11節。また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。

モーセの十戒の第四戒は安息日の労働禁止の戒めである。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」安息日は、主が6日間の天地創造を終えて休まれた、聖別された日である。この日には、神を礼拝し、いかなる仕事もしてはならないと規定している。

イスラエルの民は荒れ野を流浪し、カナン定着後も貧しかったに違いない。それでも、安息日を定め、神を礼拝し、仕事を休んだ。しかも、奴隷、家畜、寄留者にも及んでいた。生ける者への深い愛情が込められている。この戒めは、バビロン捕囚時代に定着したと言われている。捕囚されたイスラエル人は奴隷として、年中無休であった。彼らは安息日の戒めを盾にして、休みを主張し、実施していった。安息日に働かない彼らを兵役につかせることもできない。兵役免除も勝ち取っていった。安息日の戒めは、神を礼拝し、自分の立っている位置を確認し、歩むべき方向を見定める人間を回復する戒めであった。ところが主イエスの時代、弱者を守り生かす戒めが、彼らを差別、抑圧する道具になり、権力者に都合のいい管理体制を作り出していたのである。

主イエスは安息日に会堂に入り、教えておられた。その会堂に右手の萎えた人がいた。律法学者やファリサイ派の人々は訴える口実を見つけようとして、主イエスが安息日に病気をいやす仕事をするかどうか注目していた。彼らの考えを見抜かれた主イエスは手の萎えた人を会衆の真ん中に立たせた。そして「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」と尋ねた。彼らは返答に窮した。主イエスは一同を見回して「手を伸ばしなさい」と言われた。すると、萎えた右手はいやされ、元どおりになった。ファリサイ派の人々は安息日の律法違反と自分たちのメンツが公衆の面前でつぶされたことに怒り狂って、主イエスを殺そうと話し合った。

私たちの間で、法が人を苦しめ、不幸に追い込んでいく逆転が起こっていないか。「国旗・国歌法」が制定された時、この法による「強制」はないと言っていた。ところが、学校の入学式や卒業式で「君が代」斉唱が強制されている。アジア太平洋戦争で戦争遂行の精神的支柱になった「君が代」は歌えないという教師たちを処罰し、減給措置を取っている。法が権力者によって、国民を管理し、支配する道具に用いられてはならない。